

# 第35回 土光杯全日本青年弁論大会

## テーマ「私の100歳時代プロジェクト」

誰もが経験したことのない、100歳まで生きることが当たり前となる時代を迎えつつある日本。どうすれば個人の意識や組織のあり方、社会構造の変革を促せるか。第35回土光杯全日本青年弁論大会（フジサ

ンケイグループ主催、積水ハウス特別協賛）が12日、東京・大手町のサンケイプラザホールで開かれ、若者たちが熱弁をふるった。大会テーマは「私の100歳時代プロジェクト」。論文審査を勝ち抜いた井土

11人のうち、最優秀賞の土光杯、優秀賞の産経新聞社杯、フジテレビ杯、ニッポン放送杯、岡山出身の土光敏夫氏にちなんで設けられた特別賞の岡山賞に輝いた5人の要旨を紹介する。

※要旨略



土光杯全日本青年弁論大会  
行政改革に大きな足跡を残した故土光敏夫臨時行政調査会長の「行革の実行には若い力が必要」との呼びかけに応じてフジサンケイグループが昭和60（1985）年に創設。テーマはその後、拡大され、日本の将来を担う若者の主張の場として毎年開催される。

講評

### 「11の未来語ってくれた」



審査委員長

拓殖大学学事顧問

渡辺利夫氏

今、少子高齢化が大変な速度で進み、経済のグローバル化にはとめどもないものがあり、米中覇権争奪の動きが続いている。この3つをみるだけでも私たちは大変、不透明な時代を生きているのだと思います。

そのような時代に、若者が未来をどう捉えているのかを語ってほしいと願って、あえて「私の人生100歳時代プロジェクト」というテーマを掲げました。不透明な時代を生きるわれわれに一つの形ある未来を展望してほしい、というのが私たちの願いでありました。11人が11の未来を語ってくれたように思います。

最優秀賞・土光杯の波田大専君。体験に基づいた、具体的でアピール力のある語り口でした。やっかいな規制があり、これを緩和、排除しなければならぬ。それを実現するために自分が政治家になるほかに、との高い志を語ってくれました。胸が熱くなりました。

岡山賞の平井仁子さん。未来というものは悲観的に語られる傾向がありますが、あえて未来を明るく展望してくれるような語りをしてくださいのように思います。聞いてくれる人を幸せにしてくれるような語り口も評価の対象でした。

審査委員は次の通り。渡辺利夫（拓殖大学学事顧問）▷中静敬一郎（岡山放送社長）▷平野啓子（語り部・かたりすと、大阪芸術大学教授）▷葛城奈海（ジャーナリスト・

俳優）▷石原正人（フジテレビジョン報道局長）▷桜井達也（ニッポン放送報道部長）▷乾正人（産経新聞社論説委員長）＝敬称略